

恵み

# 3 鹿児島の温泉の魅力と観光まちづくり



東川 隆太郎  
HIGASHIKAWA Ryutarou

NPO法人まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会  
代表理事

鹿児島はその全域に温泉が分布する全国でも屈指の温泉県である。古来、親しまれてきた鹿児島の温泉の歴史にふれ、秘湯と呼ぶにふさわしい離島にある温泉と、近年活発になってきた、温泉を活用した観光やまちづくりの取り組みを紹介する。

## 全国屈指の温泉県としての鹿児島

シンボルでもある桜島を筆頭に、鹿児島の魅力は火山に由来していることが多い。全国にも知られる観光地の霧島や指宿は、火山地形の発達した地域であり、温泉地としても知られる。つまり、火山の多さに比例して、その恵みでもある温泉の豊かさにも結びついているのだ。

データにおいてもそのことは顕著であり、平成22年3月現在の環境省の調べによると、鹿児島県における源泉数は2,753ヶ所で全国第2位、湧出量は199,104ℓ/分で全国第3位、温泉使用の公衆浴場は550施設で全国第2位となっている。また、鹿児島県において人口が最も多い鹿児島市の源泉数は約270ヶ所で、県庁所在地における源泉数の多さが全国第1位となっている。このようにデータだけを眺めても、全国屈指の温泉県であることは理解されるが、鹿児島県の温泉は霧島や指宿、鹿児島市に限らず、



写真1 安楽温泉にある温泉神社

県北部の北薩地域や大隅半島、または離島にも広く分布している点にも特徴がある。

温泉には、直接的に火山との関係性が示される火山性温泉と、比較的新しい時代に活動した断層の割れ目に沿って湧出する非火山性温泉がある。霧島火山帯に分布する温泉は火山性温泉ということであり、北薩地域や大隅半島に点在する温泉は非火山性温泉といえる。

こうした変化に富んだ鹿児島の温泉は、掘削技術が現代のように発達していない時代にも史料などに登場し、古い歴史を誇るという側面もある。ここでは「歴史」の視点から鹿児島県内の温泉にふれ、また離島の温泉と観光まちづくりの取り組みも紹介する。

## 史料からながめる鹿児島県の温泉史

鹿児島県内において、記録として確認できる最も古い温泉は霧島市にある安楽温泉とされている。温泉街の中心には温泉神社が建立されていて、その境内に神社建立の由来を刻んだ「熊野権現碑」がある。これによると、こうじ 康治元(1142)年に現在の和歌山県の熊野から、とある聖人によってご神体が運ばれ、神託によってそのご神体を安置した土地から温泉が湧出したとのこと。温泉神社には、他にも江戸時代の文化5(1808)年に第9代薩摩藩主島津齊宣なりたけ公が夫人と入浴された、との記録も伝わっていることから、当時から藩内でも知られた温泉地であったようだ。

この安楽温泉の南側に位置する日当山温泉には、永仁元(1293)年に建立由来がある「湯本大権現碑」が大切に安置されていて、安楽温泉同様の歴史性を



写真2 日当山にある西郷滞在の屋敷(復元)



写真3 塩浸温泉にある龍馬公園

物語っている。また江戸時代後半に薩摩藩によって編纂された地誌『三国名勝図会』には、霧島山周辺の硫黄谷・栄之尾・丸尾といった名湯としても知られる温泉についての細やかな記載がある。

同じように鹿児島県を代表する指宿温泉の歴史も古く、指宿という地名にも関わる天文12(1543)年の「方柱板碑」が市街地近くの光明禅寺に保存されている。この板碑には「湯豊宿」という文字が刻まれていて、戦国期にはすでに湧出量の豊富な温泉地であったかのような印象を与えてくれる。前述の『三国名勝図会』にも摺ヶ浜温泉の砂蒸しに関する記載があり、第2代薩摩藩主島津光久公がこの地に行館(別邸)を設けたことも伝えている。他にも弥次ヶ湯や二月田温泉といった、今も趣のある公衆浴場として市民からも親しまれている温泉も、江戸時代にはすでに存在していたことがわかっている。また砂蒸し湯に関しては、日本に初めてキリスト教を伝えたザビエルの来日以前に日本の様子を記し、事前情報として報告されたジョルジュ・アルバレスの『日本見聞記』にも記載がある。このことから、少なくとも天文16(1547)年には砂蒸し湯が地域の人々によって親しまれていたことが理解され興味深い。

江戸時代の史料には、湯之元温泉(日置市)、市比野温泉(薩摩川内市)、入来温泉(薩摩川内市)、紫尾温泉(さつま町)なども登場し、掘削技術が大きく進展する明治期以前にも、各地域で温泉が特権階級の人々はもちろん、庶民も親しめる状況にあったことが理解できる。

明治期の温泉に関しては興味深い記録もある。明治19(1886)年に内務省衛生局から出版された『日本鉱泉誌』によると、全国において入浴者数の多い温泉ランキングの第5位に「福山宮ノ脇」、第9位に「福山宮ノ下」が登場する。これは鹿児島県内となる第

12位の「硫黄谷」や第20位の「塩浸」をおさえてのランク入りである。硫黄谷や塩浸の温泉は現在でも霧島を代表する温泉にあたるが、前述の福山の温泉は現在営業されておらず、浴場の場所も不明瞭である。ただ、あったと推定される宮浦宮という神社の門前には、今でも湧出温度の低い鉱泉が地中からしみ出ている。時々周辺にかすかな硫黄臭がたつこともある。ほんの一時期ながらも、賑わいのある温泉の存在がほうふつされ感慨深い。

## 幕末・明治維新期の偉人たちが親しんだ温泉

鹿児島を代表する偉人の西郷隆盛は、どの偉人たちよりも鹿児島の温泉を愛していた。特に、明治6(1873)年に政府内の意見対立から鹿児島に下野した後から、明治10(1877)年の西南戦争で亡くなるまでの間、狩猟と共に様々な温泉で湯治を楽しんでいた。なかでもお気に入りには日当山温泉(霧島市)で、史料で確認できるだけでも5回は訪れている。それだけに日当山温泉には、西郷に関する素朴なエピソードが数多く伝わっている。例えば、西郷は細かいことを気にしない性格なのか、お湯に浸かる際には汚れのたまりやすい排水口の近くを好んだとか、湯気のたつ浴槽内に頭を丸めた西郷さんがいたところ、お寺の住職に勘違いされたとかいったユニークなものである。一方、明治7(1874)年2月に訪れた指宿の鰻温泉では、同じく明治政府から下野した佐賀の江藤新平と会談を行っており、政府に対する反乱決起には現段階では応じられないことを伝えるという、緊迫した雰囲気を与える話が残っている。

対して、あまり温泉とともに語られないのが鹿児島を代表するもう一人の偉人の大久保利通。しかし、少年期には桜島の温泉や入来温泉に家族とともに出かけ、湯口にいたずらをするなどやんちゃな様子が



写真4 薩摩硫黄島東温泉



写真5 口永良部島寝待温泉



写真6 中之島東区温泉

伝えられている。

近年、大河ドラマにも登場し、全国区となった偉人に小松帯刀がいる。この人物は西郷や大久保と違い身分が高く、藩主などが入浴できるような格式の高い温泉地へ赴いていた。小松自身が記した『小松帯刀日記』によると、小松家を継ぎ結婚も果たした直後の安政3(1856)年、夫人同伴で霧島の栄之尾温泉に湯治旅行を行っている。

同じように霧島へ新婚旅行を行ったのは、小松とつながりの深い坂本龍馬と妻お龍である。ふたりの旅は薩長同盟締結後の慶応2(1866)年で、新婚旅行としては実際のところ小松の方が少し早いことになる。どちらにしても龍馬の旅も紹介者は小松であり、旅先も共通して霧島であることも興味深い。さて、坂本龍馬が霧島で湯治をしていた塩浸温泉は現在公園として整備され、大河ドラマの影響もあって平成22年度は多くの観光客でにぎわった。また、坂本龍馬の新婚旅行の道筋は、地元の有志らが結束して「龍馬ハネムーンウォーク」と題したイベントを開催していて、平成24年3月には16回を数えている。

明治維新の原動力ともなった偉人たちにとって、鹿児島島の温泉はくつろぎの場である以上に、世の中を改革させるなにかを養う場所であったのかもしれない。

### 秘湯としての価値の高い離島の温泉

鹿児島県の温泉の特徴は、南西方向へ連続する離島に分布している点にもある。島の連なりは霧島火山帯と並行しており、活火山を有する島にはそれぞれ秘湯と呼ぶにふさわしい温泉がある。どこもアクセスに関してはそれなりの時間と工夫が必要な場所ばかりだが、訪れ入浴すれば、誰かに自慢したくなるような満足感を得ることができる。

まず、鹿児島港からフェリーで約3時間半のところに位置する薩摩硫黄島には、海岸に2ヶ所の露天風呂と村営による開発センター内の内湯があり、どこも気軽に親しめる温泉として人気がある。特に東温泉は、視界が良好な日には屋久島を眼前に望み入浴でき、周辺の自然景観とともに訪れる人々を魅了している。

世界自然遺産の屋久島では島の南側に温泉が点在している。平内海中温泉や湯泊温泉は、地元の方々の利用率も高く、混浴露天というかなりオープンな雰囲気と併に話題性は高い。ただあまりにも開放的すぎるために、入浴を躊躇される方もいるほどである。尾之間温泉は、施設の整備された公衆浴場で、少々深めの浴槽の底には自然石が敷き詰められて、足裏へのかすかな刺激が心地よく、登山帰りに疲



写真7 悪石島砂蒸し



写真8 桜島ミュージアムによる温泉足湯掘り体験



写真9 指宿山川の砂蒸し



写真10 鰻温泉のスメ

れを癒すお客さんも見受けられる。

屋久島の隣に浮かぶ口永良部島には、それぞれ泉質も雰囲気も異なる4ヶ所の温泉がある。やはり秘湯好きにはたまらない火山の島である。特に島の北西に位置する寝待温泉は、その名前が象徴するように、海岸沿いの浴場周辺に湯治客のための簡易宿泊施設が設置されている。近年、こうした島の火山や温泉を情報発信し、移住も含めた来島者増加を図る若者たちが「へきんこの会」を結成、島の活性化に一役買っている。

村域が130kmという日本一長い村の十島村は、有人・無人含めて12の島からなり、そのうち有人7島すべてに温泉がある。口之島のセラマ温泉は、全国でも珍しい野生牛が生息する島だけに、露天風呂に入浴していると野生牛が近くを横切るのを目撃することがあるという。中之島には住民管理の公衆浴場が二つあり、清潔感も保たれており観光客にも好評だ。悪石島には地熱を利用した蒸し湯と、露天と内湯両方を楽しめる施設が充実している。周辺に野生のヤギがうろろしているのも島らしい。小宝島の湯泊温泉は乳白の色と塩分濃度の高さが特徴の泉質であり、海岸端の露天風呂のみ。そこまで向かう道路も地熱によって温かく、毛布を敷いて岩盤浴を楽しむ方もいるという。

それぞれの島にとって、温泉は来島者を満足させるための重要な地域資源といえるし、島によって温度差はあるものの、その特徴を活用する動きが、少しずつ始まろうとしている。

### 温泉を活用した観光まちづくりの取り組み

鹿児島を代表する火山の桜島では、新しい観光メニューの開発に取り組むNPO法人桜島ミュージアムがコーディネートし、かつて温泉が湧出していた海岸

で足湯を掘る体験メニューを提供している。近年は珍しさもあって修学旅行などによる体験利用が増加し好評を得ている。

温泉観光地の指宿では、指宿温泉の代名詞でもある砂蒸し以外の選択肢となりうる鰻温泉のPRに積極的である。この温泉には地熱を利用した調理用のかまどであるスメ(地域の言葉)があり、これを利用した料理が提供されている。また、西郷隆盛が湯治をしたという歴史的背景や、映画『男はつらいよ』のロケ地になったなどのストーリーの掘り起こしも行われている。さらに、平成23年からは地元の民間企業が、温泉まち歩きのコース設定や案内人の育成にも取り組みは始めている。

霧島では、平成22年に霧島山が日本ジオパークに加盟したことを受け、価値ある火山地形や地質を観光やまちづくりに連携させる動きが旅館組合などを中心に活発化している。火山噴火によって形成される地形は、パワースポットと呼ぶにふさわしい景観を生むことから、訪ねやすくするための環境整備が進められている。

全国屈指の温泉県といえる鹿児島だが、「温泉」を活用した観光やまちづくりに関しては積極的な部分もあるものの、まだまだ展開の余地があると考えている。これまで以上に「温泉」を様々な視点から活用する選択肢を持つことが、より鹿児島の温泉の良さを知ってもらうことにつながる。日本人にとっては当たり前前の温泉だが、貴重な資源であることには変わりなく、垂れ流すがままにしておくにはもったいない。県内全域に分布するという特徴もふまえて、温泉をテーマにした「遊び」や「学び」といった入浴以外の楽しみ方がさらに模索されてほしいと願う。